平成25年度

宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国　　語

注　　意

1　監督者の「始め」の合図があるまでは，開いてはいけません。

2　試験時間は，板書されている時間割のとおりの50分間です。

3　問題数は大きな問題が5問で，表紙を除いて10ページです。

4　解答用紙は1枚で，答え方はマークシート方式です。

5　監督者の指示にしたがって，試験開始前に受験番号と氏名を解答用紙のきめられた欄に書き，さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。

6　答えは，解答用紙に記載されている〔解答マーク記入上の注意〕，および試験開始前に行われたマークシート練習プリントにしたがって，ていねいにマークしなさい。

7　試験中に質問があれば，手をあげて監督者に聞きなさい。

8　監督者の「やめ」の合図があったら，すぐやめて，鉛筆をおきなさい。

一

次のそれぞれの問いに答えよ。

問一 次の──線のカタカナにあてはまる漢字を、それぞれ［　］の中から選べ。

(1) 引退を表明したがイ留された。
［ア 遺　イ 慰　ウ 居　エ 依］

(2) 台風によって多くの畑がカン水した。
［ア 陥　イ 完　ウ 冠　エ 貫］

(3) 業者に屋根の修ゼンをお願いする。
［ア 全　イ 善　ウ 繕　エ 前］

(4) 幼児の入場は保護者同ハンに限られている。
［ア 伴　イ 班　ウ 般　エ 搬］

問二 「憲」の部首はどれか。

ア 宀　イ 主　ウ 皿　エ 心

問三 A・Bに同じ漢字が入る熟語はどれか。

ア 以A 伝B　イ 首A 一B
ウ 空A 絶B　エ 因A 応B

二

次のそれぞれの問いに答えよ。

問一 次の例文のでと意味・用法が同じものはどれか。

この本は私のでと、あの本があなたのだ。

ア 電車内には本を読んでいる人が多くいた。
イ 疲れた体を休めるために山小屋で一休みする。
ウ ここは平清盛（たいらのきよもり）ゆかりの地である。
エ 今日の波は穏やかである。

問二 同じ語に対する尊敬語と謙譲語の組み合わせとして、適当でないものはどれか。

ア ご覧になる ── 拝見する
イ お聞きになる ── うけたまわる
ウ なさる ── 行う
エ いらっしゃる ── うかがう

問三 次の例文の──線の動詞の活用形はどれか。

彼は、私といっしょに図書館へ行くと言っていた。

ア 連体形　イ 未然形
ウ 連用形　エ 終止形

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある人、供の者と寺へまゐる。和尚この人を御覧じて、「さて(a)さて奇特の御参詣。」と請じ給ひて、寺の者を呼びて、「まづまづお茶進上申せ。①もみぢにたててまゐらせよ。」とおほせらる。この人聞きて②不審して、いろいろ案じても合点ゆかず。「いやいや、［　　］。」と思ひ、和尚に問ひ申せば、「こうようたてよ、③と申してさうらう。」とおほせらる。「もつとも。」と(b)感じて④帰りにけり。

（「きのふはけふの物語」から）

問一

(1) (a)奇特の、(b)感じての本文中での意味は、それぞれ後のどれか。

(a)奇特の

ア あやしい　**イ** 感心な　**ウ** 尊い　**エ** 待ちに待った

(b)感じて

ア 神仏に強く感応して　**イ** とても愉快に思って　**ウ** 深く心を動かされて　**エ** 自分の無知を恥じて

問二 ①もみぢにたててまゐらせよ。の意味として適当なものは、次のどれか。

ア 紅葉した木々の下でお茶をお召し上がりください。
イ お茶を濃くよく入れて差し上げなさい。
ウ 茶葉を立てて神仏の霊験を御覧にいれなさい。
エ 紅葉に見立てられるような高揚した心でお茶をご賞味あれ。

問三 ②不審して、とあるが、この時「この人」が「不審」に思った内容として最も適当なものはどれか。

ア 自分が歓待を受けている理由
イ 「和尚」がお茶を出してくれる思惑
ウ 「和尚」のことばの意味
エ 他の参詣者が見当たらないという状況

問四 ［　　］に入ることわざとして適当なものはどれか。

ア 聞くは一時の恥　**イ** 損して得取れ
ウ 魚心あれば水心　**エ** 三人寄れば文殊の知恵

問五 ③申してさうらう、④帰りにけりの主語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア ［③ 寺の者　④ この人］　**イ** ［③ 和尚　④ 供の者］
ウ ［③ 寺の者　④ 供の者］　**エ** ［③ 和尚　④ ある人］

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

あるフランス文学者は、しょっちゅう傘を忘れてくる。奥さんが、わるい頭ではないのに、どうしてこんなへまなことをするのか、とあきれたそうである。

中国の詩人賈島は自作中の句「僧は推す月下の門」がいいか、「僧は敲く月下の門」にしようかと迷って歩いていて、別の詩人の行列にぶつかってしまった。わけをきいた行列の詩人の助言によって「敲」にした。この故事にもとづいて、①推敲ということばが生まれたのだという。ぶつかった詩人は、詩の文句に夢中になっていて、目の前の行列が、見れども見えざる状態になっていたのである。

傘を忘れた先生も、ほかのことを考えていて、傘をもって帰らなくてはいけないということがすっかり消えてしまった。忘れた、のではない。傘のことなど存在しなくなったのである。ないものをもって帰るのは不可能であろう。心なき第三者が、それをうっかり、ぼんやりしていて忘れた、というに過ぎない。②だれにでも似たことはたえずおこる。

お互いに、頭、頭というけれども、考えてみると、ひとつではなく、二つの頭があるように思われる。

ひとつは、目の前のものごとを認識し、判断する即物的思考をする頭である。具体的な頭としてもよい。もうひとつは、「いまここで」を多少とも離れたものごとを考え、思う、など抽象的な働きをする頭である。

前者の即物的、具体的な頭を、仮にアルファーの頭と呼ぶならば、後者の抽象的思考をする頭をベーターの頭としてよいであろう。両者は同じ頭でありながら、直接には関係がないように見える。

〔　Ⅰ　〕

③ものを考える人が俗事にうとく、とんでもないへまをするのを「うっかり」したという。英語ではアブセント・マインディッド、(absent-minded) つまり「心がお留守になる」のである。

このとき、留守で、いなくなるのは、どちらの頭であるかといえば、アルファーの［　A　］な頭である。それで、とんちんかんな間の抜けた、おかしいことをする。ベーターの頭に支配された人間は、非現実的な行動をしやすい。傘を忘れるくらいは朝飯前。

学者は、アブセント・マインディッドの典型だとされているが、ベーターの頭で生きることが、普通の人よりも多いからである。

〔　Ⅱ　〕学者でなくとも、夢みることの多い生活をするならば、アブセント・マインディッドの状態は［　B　］であろう。

④アルファー頭が休止したとき、うっかり、ぼんやり、心がお留守の状態になる。それではベーターの頭が休止したときも、同じよう

にアブセント・マインディッドというであろうか。

C。なぜかというと、ベーター頭がお留守になっても、外からはわからない。（　**a**　）、人間だれしも、ベーターの頭を休業にしていることが実に多いからである。（　**b**　）、一日のうちで、ベーターの頭を使っているのは、ごく短い時間でしかない。ときと場合によっては、まったくベーター頭を働かせないで、（　**c**　）、日常生活には何の支障もなく過ごすことができるのである。〔 **Ⅲ** 〕

勉強はベーターの頭でする。ベーターの頭をフルに働かせるには、アルファーの頭はお休みにしなくてはならない。ご飯を食べながら、おもしろいゲームをしながら、（　**d**　）ほかの仕事をしつつ勉強をするのは困難である。

家庭の茶の間は即実的でありすぎる。茶の間でものを考えるのは、容易ではない。学校というところがあり、教室という、いくらか浮世離れた環境におかれて学習するわけである。ベーター頭が働きやすく、俗事を忘れ、勉強に没頭できやすい。〔 **Ⅳ** 〕教室をあまり快適にするのは考えものである。アルファー頭がうごめき出したりしては面倒である。

勉強部屋のあることは、頭をアルファーからベーターへ切り替えるのに便利である。昔はそういうぜいたくを許されなかったが、いまのこどもは、その点、たいへん恵まれている。日本のこどもの勉強部屋普及率は世界一だという。

⑤教室、勉強部屋では、安心して「うっかり」アブセント・マインディッドになることができる。それが、知的活動を高める状況であるのはいうまでもない。

（外山滋比古（とやま しげひこ）「ちょっとした勉強のコツ」から）

問一 ①推敲の現在使われている意味として最も適当なものはどれか。

ア 詩や文章を作るにあたって、格調の高さを求めて表現技巧に注意を払うこと

イ よりよい詩や文章を作るために、その字句や表現について専門家の意見を求めること

ウ よりよい詩や文章を作るために、その字句や表現を何度も練り直すこと

エ 詩や文章を作るにあたって、同じ文章を何度も書いてみること

問二 ②だれにでも似たことはたえずおこる。とあるが、その例として適当でないものはどれか。

ア 電車の中で夢中になって本を読んでいたら、降りる駅を一つ乗り過ごしてしまった。

イ 買い物をしてレジでお札を出そうとしたら、間にはさまっていた小銭を落としてしまった。

ウ 赤信号なのに、考え事をしながら歩いていたので横断歩道を渡ってしまった。

エ 学校から帰って宿題をしていたら、ピアノのレッスン日だったことを忘れてしまった。

問三 次の一文が入るところは、本文中の〔 Ⅰ 〕から〔 Ⅳ 〕のどこか。適当なものを後から選べ。

> むずかしいことを考えられる優れたベーター頭をもつ人が、忘れていけないものを忘れるというあわれな頭しかもっていないこともあるからである。

ア 〔 Ⅰ 〕 **イ** 〔 Ⅱ 〕 **ウ** 〔 Ⅲ 〕 **エ** 〔 Ⅳ 〕

問四 ③ものを考える人とあるが、「考える人」として適当なものはどれか。

ア 夢みがちでありながら日常的な思考もする人

イ 即物的な思考をしがちな人

ウ 具体的かつ非現実的な思考ができる人

エ 抽象的な思考をすることの多い人

問五 [A]・[B]に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア [A 抽象的 B 現実的]

イ [A 常識的 B 日常的]

ウ [A 具体的 B 夢想的]

エ [A 非現実的 B 慢性的]

問六 ④アルファー頭が……状態になる。とあるが、その結果の説明として適当なものはどれか。

ア アルファー頭とベーター頭が存在しているので、ベーター頭の機能にも影響を及ぼす状態になる。

イ アルファー頭は具体的な思考をするため、物事をまったく考えられずに何もできない状態になる。

ウ 即物的なアルファー頭によって普段の生活が営まれているので、生活に支障をきたす状態になる。

エ アルファー頭が休止するとベーター頭のみが働いて、抽象的な物事しか認識できない状態になる。

問七 **C** に入る語として適当なものはどれか。

ア いえるかもしれない　**イ** わからない

ウ どちらともいえない　**エ** いわない

問八 （　**a**　）から（　**d**　）に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア［**a**それに　**b**それどころか**c**しかも　**d**あるいは］

イ［**a**しかも　**b**あるいは　**c**それに　**d**それどころか］

ウ［**a**それどころか　**b**しかも　**c**あるいは　**d**それに］

エ［**a**あるいは　**b**それに　**c**それどころか　**d**しかも］

問九 ⑤教室、……ができる。とあるが、その内容として適当なものはどれか。

ア 教室などの浮世を離れた環境では、アルファー頭だけでなくベーター頭までが働くということ

イ 教室は、俗事をこなすアルファー頭の力を発揮することができない場所であるということ

ウ 勉強部屋や教室などは日常の空間とは違うため、抽象的な思考のベーター頭になりやすいということ

エ 勉強部屋は、ベーター頭からアルファー頭にすばやく切り替えられる唯一の場所であるということ

五

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

木島（きじま）は休むつもりはないらしかった。五時間目が終わり、十分の休み時間、仲間たちに声をかけられてもろくすっぽ返事もせず、彼はちょっと呆（あき）れたように連れだって教室を出ていってしまった。①私は動けなかった。もし自分が描かれているんじゃなくても木島のそばから動けなかったと思う。木島が鉛筆で描いているのは、ただの下書きじゃない。これは、水彩画じゃない。水彩画にはならない。木島は二本の鉛筆――たぶん３ＢとＨＢだと思う――だけを使って、柔らかい輪郭線をとり、色も影も灰色や黒のトーンで描きこんでいる。このまま最後まで単色の濃淡で仕上げてしまうつもりだろう。鉛筆だけでこんなふうにじっくりと作られている絵の世界を初めて見た。きれいだと思った。二本の鉛筆で、なんと多彩な線が引けるんだろう。その線たちが、なんと見事に形を作っていくんだろう。

でも――と私は思った。なんか、よそゆきの感じがする。らしくない。いつもの似顔絵のやーらしさがない。あの強烈な個性がない。ドキッとするような大胆でシャープな線がない。たぶん、正確に描こうとしすぎてるんだ。木島の落書きには、独特の歪（ゆが）みがあって、モデルの特徴を鋭く捕らえる。今、スケッチブックに描かれている私は、人間というリアルな物体だけど、髪や服の質感は見事だけど、②どんな名前の十六歳の少女でもいいような感じがした。

六時間目が終わりに近づいても、木島は絵具を出す気配はなく、影や色を灰色や黒のトーンで細かく描きこんでいる。鉛筆の数は三本に増えた。〔 Ⅰ 〕美術の大森（おおもり）先生はゆっくり巡回しながら、アドバイスをしていたが、木島の後ろで歩みを止めた。顔つきが（ a ）険しくなる。「何をやってるの？」三十半ばで、神経質そうな大森先生は男にしてはかん高い声で（ b ）聞いた。「デッサンをやれって誰（だれ）が言った？」木島の鉛筆が静止した。「どうして、君は、いつも、そういうことばかりするの？」大森先生はイライラした様子で片足のかかとを細かく踏みならした。「あのねえ、美大を受けるにしても、デッサンだけやればいいってもんじゃないよ。それにね、これは授業なんだから、ちゃんと言った通りにしてくれないと困るんだよ」「受験とか、そんなんじゃないス」木島は（ c ）答えた。「じゃあ、なんだ？」先生の声は低くなり、そのぶん、怒りが激しくなったのが感じられた。木島は細い目をいっそう細めた。〔 Ⅱ 〕一瞬、何か鈍い悲しみや痛みのようなものが彼の顔に浮かんだ気がした。私は（ d ）胸を突かれたが、彼はまたすぐに目を伏せてしまった。机に置いている両の拳（こぶし）に力がこもった。何かに耐えているように、何かを激しく迷っているように。節のところが白く尖（とが）って見えた。そして、彼はゆっくりと口を開いた。「鉛筆でちゃんと描けるようにならないと、色が使えないんです」「だから、なんで？」先生の声には苛立（いらだ）ちのほかに強い侮蔑（ぶべつ）と圧力がこめられていた。木島の顔からふっと表情が消えた。いつか

見たことのある寒い顔になった。それからは何を聞かれても言われても一言も口をきかなくなり、ついに教室から出ていくように命じられた。③木島はスケッチブックとペンケースを持って、あっさりと出ていってしまった。描きかけの私の絵も出ていってしまった。

教室の中は、みんなが［　　］ような堅い沈黙がたちこめていた。私はしばらく茫然としていた。何が起きたのかよく飲みこめなかった。わかるのは、この教室の中で最高の絵描きがいなくなってしまったこと、もっと見ていたかった絵が消えてしまったことだけだった。私はいきなり立ち上がった。ふと思いついて、美術の授業が始まる前に渡り廊下から見た、サッカー部の部室の前へ行ってみた。教室を追い出された流浪の絵描きは、別にたいして悲しそうでもなく、フェンスに向かってゆるやかに上っていく芝生の傾斜地に横向きにごろりと寝そべっていた。私に気づくと、ちょっと驚いたように目を見張ってみせた。〔　Ⅲ　〕こんなふうに追いかけてきたものの、いざとなると、なんて言ったらいいのか、ぜんぜんわからなくて、身体中の血液が顔に向かって逆流してくる気がした。④木島は面白がってるみたいにじろじろ見ているだけで、何も言ってくれない。しょうがなくて、やっとの思いで言葉を口からしぼりだした。「最後まで描く？」すっげえマヌケに響いた。木島は切れ長の細い目の中に疑問符を浮かべて、まだ口をきかない。「絵だよ」私はぶっきらぼうに説明した。「見て描いた方がいいんでしょ？」木島は芝生の斜面に肩肘をついて、ゆっくり上半身を起こした。「さっきの？」木島はたいした熱意もなく聞き返した。私はうなずきながら、少しがっかりし、とても恥ずかしい気持ちになった。のこのここんなところまで来ちまって……。ここで何してるんだか。視線をどこに向けたらいいのか、わからなくなった。⑤自分の足元を見たり、木島の頭の上のほうにある緑のフェンスを見たりしていた。

「なんか、ちげえなァ」しばらくして、つぶやくような木島の声がした。目が合った。また観察の目つきで不遠慮にじろじろ見ている。そして、脇に置いてあるスケッチブックを取り上げると、私を描いたページを開いて眺めた。首を傾げた。〔　Ⅳ　〕「なんかな、ぜんっぜん違うね？」同意を求めるように言われて、私も木島の横に膝をついて身をかがめて絵をのぞきこんだ。それは描きかけでも人を惹きつける力を持った美しい鉛筆画だった。大人の美術の先生がジェラシーを感じたとしても不思議はないような優れた技術だった。でも、木島はたぶん、そんなことが聞きたいんじゃないんだ。「自分の顔ってわかんないよ」私は言った。「でも、いつも描いているラフなスケッチのほうが、いい。ああいう線のほうが、いい」「何、スケッチって？」木島は横目で私を見た。それから、鼻でフッと馬鹿にしたように笑った。「授業中に遊んでるヤツ？」⑥私は笑わずに重々しくうなずいた。

「なんで……」木島は質問しかけて、気が変わったように、「いつか、すげえ怒ってたじゃん」とぽつんと言った。「怒るくらい……パワーがある」私は答えた。木島は何も言わずに、また私を見ていた。

「村田さんの似顔絵は描けねえかもな」ようやく独り言のようにぽっと言った。「なんで？」「すげえむずかしいんだよ。顔じゃなくて

さ。なんか人間の感じがさ」ドキドキが止まらなかった。すごくコワイことを言われたような気がした。

（佐藤多佳子「からっぽのバスタブ」から）

問一 ①私は動けなかった。とあるが、その理由として適当なものはどれか。

ア 「木島」が出ていってしまうことは想定外で、どうしていいかわからなかったから

イ 絵ができあがっていくのをそばで見ていたいという思いがあったから

ウ 自分がモデルとなっている絵が、いつものように個性的なものではなくてがっかりしたから

エ 鉛筆だけで仕上がった絵を見て、その完成度の高さに衝撃を受けたから

問二 ②どんな名前の……感じがした。とあるが、その説明として適当なものはどれか。

ア リアルな絵を書くことのみを追求した結果、何の面白味もない絵になってしまっていると感じたということ

イ 人並み外れた才能が「木島」にあることを納得させる絵であるが、自分の好みの絵ではないと感じたということ

ウ 「私」にしかない個性を表現できておらず、単に技術的に優れているだけの絵であると感じたということ

エ 鉛筆だけで描いているので表現力に乏しく、モデルの特徴をとらえきれていない絵であると感じたということ

問三 次の一文が入るところは、本文中の〔 Ⅰ 〕から〔 Ⅳ 〕のどこか。適当なものを後から選べ。

視線は空に泳ぎ、何もとらえていなかった。

ア 〔 Ⅰ 〕 **イ** 〔 Ⅱ 〕 **ウ** 〔 Ⅲ 〕 **エ** 〔 Ⅳ 〕

問四 （ a ）から（ d ）に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア [a はっと b ぼそりと c とげとげしく d すっと]

イ [a すっと b ぼそりと c とげとげしく d はっと]

ウ [a はっと b とげとげしく c ぼそりと d すっと]

エ [a すっと b とげとげしく c ぼそりと d はっと]

問五 ③木島は……出ていってしまった。とあるが、その理由として最も適当なものはどれか。

ア 教師の立場を利用して一方的に自分のやり方を押し付けようとする「大森先生」に、強い反発心を抱いたから

イ 「村田」を思い通りに描くことができず、「大森先生」に逆らってまで描き続けようとする気力を失っていたから

ウ　生徒の作品を見てその技術の高さに嫉妬（しっと）している「大森先生」を、教師の資格などない人間であると感じたから

エ　感情を高ぶらせながら叱責（しっせき）してくる「大森先生」は決して自分の思いを理解することのない存在だと判断したから

問六　［　　］に入る語として適当なものはどれか。

ア　息を殺している　　イ　根を詰めている

ウ　満を持している　　エ　胸をふくらませている

問七　④木島は……言ってくれない。とあるが、その時の「木島」の様子として最も適当なものはどれか。

ア　「村田」が予想通り自分の後を追ってきたので、密（ひそ）かに心の中で喜んでいる。

イ　自分を必死になって追いかけてきた「村田」の行動に、興味を抱いている。

ウ　一人になりたくて外に飛び出したのに、「村田」が追いかけてきたことを迷惑に感じている。

エ　モデルにしていた「村田」を改めて見てみると、自分の絵の出来の悪さが思い知らされてがっかりしている。

問八　⑤自分の……見たりしていた。とあるが、その時の「私」の気持ちの説明として最も適当なものはどれか。

ア　自分の絵を描くことへの未練が「木島」からは感じられず、ばつの悪さを感じている。

イ　「木島」のよき理解者であると自負していたが、いざ「木島」の前に出るとかけるべき言葉が見つからなくて戸惑っている。

ウ　「木島」の冷淡な態度に、「木島」の絵のモデルにふさわしいのは自分だという自信を失っている。

エ　「木島」の様子が気にかかっていたが、何事もなかったかのように平然としている「木島」を見て拍子（ひょうし）抜けしている。

問九　⑥私は……うなずいた。とあるが、その時の「私」の様子として適当なものはどれか。

ア　心のままを真剣に語ったのに、冗談（じょうだん）だと決めつける「木島」に注意を促そうとしている。

イ　改まった調子で向き合うことで、「木島」にも本心を語らせようとしている。

ウ　長所をほめることで、「木島」に絵を描き続ける気力を持たせようとしている。

エ　自分の正直な気持ちを語っているということを、軽く受け流そうとしている「木島」に伝えようとしている。